未刊謠曲集

十一

田中允編

古典文庫

未刊謠曲集

十一

田中允編

古典文庫

古典文庫第二五〇冊 ©

昭和四十三年五月十日印刷発行

非売品

未刊謡曲集 一 十

編者 田中允

発行者 吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所 東京都（王子局区内）北区西ケ原三ノ三四ノ一二 古典文庫

電話（九一〇）二七一七

振替口座東京一四五九七番

目次

凡例……六
伝本解題の補遺(五)……八
伝本略号略解……一〇
各曲解題……一一
本文
塩竈（名所松嶋・松嶋）……(一)……三三
潮干……(二)……三七
潮干物狂……(二)……四一
慈恩寺……(三)……四四
四季……(三)……四七

鳴立沢……（一二）……五一
四町……（一二）……五五
信太……（一三）……六一
泗浜石……（一三）……六四
呪咀顕光……（一四）……六六
酒中花……（一四）……七一
小学……（一四）……七四
聖宝……（一四）……八〇
常楽……（一五）……八四
白菊（児が淵）……（一五）……九〇
白目……（一五）……九七
印杉……（一五）……一〇〇
真都（教経）……（一五）……一〇三
沈水香……（一六）……一〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

神泉苑……（七）……一一
杉本楠……（七）……一一四
助成寺（高塚）……（七）……一一九
涼……（七）……一二三
雀　森……（七）……一二六
硯　破……（八）……一二九
須磨猩々……（八）……一三四
須磨寺（松浦物狂）……（八）……一三八
須磨山路……（二）……一四三
須磨笛……（二）……一四九
炭火橋……（三）……一五一
清　明……（三）……一五四
関　原（俊春・関ヶ原行者・黒田ヶ淵）……（三）……一五五
石塔寺……（三）……一六一

関地蔵……（二三）……一六四
関谷刀……（二四）……一六六
雪月花……（二四）……一六九
銭掛松……（二四）……一七一
銭原観音……（二五）……一七四
象……（二五）……一七八
宗祇……（二五）……一八一
袖振山……（二六）……一八五
外浜……（二六）……一八八
卒都婆子……（二六）……一九一
染衣……（二七）……一九五
反橋……（二七）……一九九
孫次猩々（和泉猩々・七人猩々）異本……（二七）……二〇二
戴安道……（二九）……二〇五

大職冠……（二九）……二〇八
対面曽我……（二九）……二一一
鷹飼……（二九）……二一五
高重……（三〇）……二二〇
鷹尋……（三〇）……二二三
高天原……（三〇）……二二六
高安小町 異本……（三〇）……二三八
宝寺……（三一）……二三三
追記・訂正（第一冊―第十冊の分）……二三七

凡例

一、第十冊に引続き、発音別五十音順に並べた仙台本第一種の未刊曲のうち、「塩竈」から「宝寺」までの五十五番を収めた。

一、飜刻はすべて原本通りにし、私意を加えたところはすべて（　）でくくった。

一、原本には段落はないが、編者の見識で改行した。

一、異本との校合は特に注意すべき所だけにしぼった。

一、節附は印刷の都合上省略した。

一、「次第」「舞」などの演出上の重要記号は出来るだけ残したが、打切を意味する「打」間拍子を意味する「ヤ」「ヤハ」地拍子を意味する「トル」「ヲクリ」などの特殊記号は省略した。

一、「　印は原本に固執せず、詞の所（節附のない所）は「　節の所（節附のある所）は〻を付けて区別した。原本は「　のみで〻はなく、「もない場合が多い。

一、句読点は原則として原本通りにしたが、元来句読点は節譜の一種であって、

韻文の切れ目とは必ずしも一致しないから、韻文(節附のある部分)の拍子合わずの所は七五調を基準とする一節を一句と考え、拍子合いの所は八拍子を基準とする一区切を一句と考え、これらの区切の所に句読点のない場合は、それぞれ一字分空白にした。しかし原本は節附が粗雑で間拍子や地拍子の補助記号を脱している場合がしばしばなので、どこが八拍子一節の切れ目か判定に苦しむ場合に時々出合った。その場合異本があればそれが参考になったが、異本のない場合、異本があってもよくわからない場合などは、自信なく空白を設けたこともある。

一、濁点は、原本にある場合、異本を参考にして補った場合、編者の見識で補った場合の三つに分けられ、第三の場合が最も多いが、清濁いずれか不明の場合はそのままにした所もある。

一、曲名の下の数字は、底本の巻序を示した。六4は六の組の第四冊、単に2は無印組の第二冊の意。

伝本解題の補遺 (五)

内—内閣文庫本　内閣文庫蔵、下懸節付、五番綴十一冊計五十五番。近世中期頃写。浅草文庫の蔵書印あり、小野則秋氏の日本蔵書印考(一五五頁)によれば、官立浅草文庫の蔵書印に一致し、明治七年浅草蔵前片町に創立された官立浅草文庫の旧蔵本である。本文は新謡曲百番・吉川本系統で、下懸番外謡曲の最も伝本の多いいわば主流系に属し、新・吉川と重複する曲は本文も殆ど同じである。内閣本にしか伝わらないような珍曲はないが、有力な異本である点に変りはない。中で一番新しい題材は、清十郎を主人公にした「姫路」で、これは寛文元年(一六六一)の実話であり、貞享三年(一六八六)開版の西鶴の好色五人女で有名になった事件である。曲名は左の通りであるが、本のナンバーは原本にはなく、仮につけた。

＊印は未刊曲。

一、三＊嶋　長＊治　姫＊路　相　羽　狩場重光

二、会　盟　承　久　堀＊兼井　野＊草論　大　木

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

三、鎌足　影山　鶯宿梅　骸*骨　日高川
四、今泉　吉野三位　初瀬詣　吉備大臣　案字
五、古尉　秀*頼　常盤問答　末の松山　哥屏風
六、撰*択集　足引　定家桜　髭切　山*崎猩々
七、妙顕寺　松山　夢想松風　かしは木　文覚滝籠
八、藤崎　秩*父　郭*公　御*田植　春日神子
九、高野詣　現在千方　梅乙女　箱崎物狂　薬*性論
十、松尾山　北條　ほ*たる　夢ノ一字　笛物狂
十一、芳野詣　形*見巴　文僧都　小夜砧　比*叡山

伝本略号略解（五十音順）

第十一冊所見の伝本の略解。各伝本の解題は未刊謡曲集第一・二・三・九冊にあり、それぞれ１２３９でその所在を示す。

朝……朝日本（１２は第一種第二種以下これに準ず）……２
井……井上本……１
石……石田本……１
上……上杉本……１
江……江崎本……１
樺……樺表紙本……１
観……観世本……９
吉……吉川本……１
京……京大本……１
元……元文写本……１
五……五百番本……１
鴻……鴻山文庫本……１
国……国学院本……１
佐……佐野本……１
柴……柴田本……１
下……下村本……１
仙……仙台本（第八冊以下の底本）……１
田……田安本……１
田下……田中下懸本……１
茶……茶枕本……１
能……能勢本……１
浜……浜本本……２
樋口……樋口本（第一―三冊の底本）……１２
吉田……吉田本（第三―七冊の底本）……２３
了……了随本……１

各曲解題

塩竈（しほがま）別名…名所松嶋・松嶋〔下・田〕下は名所松嶋、田は松嶋とある。仙1・仙6所収の松嶋、下・観所収の松嶋十八景（下は白井松嶋とある）、元禄十四年摂陽沙門幻雲子（ゲンウンシ）作の塩竈（宝永七年頃版本あり、下村本にも写伝）などとはいずれも別曲。江崎本遠キ諷組所見の「塩かま明神」と同曲か。松嶋として吉田名寄・尊経閣本謡名国付以呂波寄後人加筆の部・江崎本遠キ諷組などに見えるが、どちらの松嶋を指すかは不明。

潮干（しほひ）〔吉・下〕吉は塩干、下は汐干とある。吉川本にはないが、底本及び下村本には寛文十年の津波で溺死した漁夫の霊が登場するから、寛文十年以後の作品であり、仙台本第一種・下村本・吉川本共にいずれも寛文十年以後の編纂であることも証明される。吉田名寄・尊経閣本謡名国付以呂波寄後人加筆の部・江崎本遠キ諷組・松尾名寄などに散見するのみ。

潮干物狂（しほひものぐるひ）名寄にも見えない珍曲。狂女物として辛うじて謡曲の

体裁を保つのみ。潮干にヒントを得ての近世の戯作か。

慈恩寺(じおんじ)名寄にも見えない珍曲。通盛の「竜女変成と聞く時は云々」の一節を借用し、後段は竹生嶋を粉本としている。近世の戯作であろう。

四季(しき)〔佐・下〕雪の翁（雪・雪女・雪折竹とも）の別名も四季といい、曲舞四季は雪の翁のクセであり、外に祝言謡の四季があるが、本曲とは関係がない。貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄所見の四季は本曲かと思われるが、雪の翁の別名の方かまたは祝言謡の方を指すかも知れない。

鳴立沢(しぎたつさは)〔田〕元禄十年刊本のある大淀三千風新作の同名曲（未刊謡曲集五所収）は新鳴立沢とも別称されるから本曲の方が古い作と推定され、江崎本諷名寄所見の鳴立沢は古い方即ち本曲らしいことは未刊謡曲集五の解題（一八頁）で述べた。本曲は文辞にも古雅なところがあり、近世初期かあるいはそれ以前に溯れる比較的古い作であろう。大淀三千風は本曲の存在を知らなかったために、自作にも同じ題名を附けてしまったのであろう。

四町(しちゃう)〔下・田〕上杉本乱曲所収の「四町」は本曲のサシ・クセで小異。

吉田名寄・松尾名寄に見えるのみ。源氏物だが、文辞稚拙で冗漫。近世になってからの作であろう。

信太(しのだ)篠田の森（未刊謡曲集五所収）と同材別曲。幸若の信田（しだ）と同材の信田（新謡曲百番所収）は下村本では「シダ」と傍訓があって、新謡曲百番その他で従来シノダと読んでいたのは誤りと思われるが、貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄に「篠田」もしくは「信田」（「しのだ」と傍訓したものもある）とあるうち、国附が常陸とある信田は勿論新謡曲百番の方であろうが、国附が和泉とあるもの、篠田と宛てたものなども、新謡曲の信田を誤ったらしく思われる。したがってこれらの名寄所見の事実を以て、本曲が貞享四年以前の作で可成り流布していたとは断定し難く、本曲はたゞ信太狐の説話の叙述に過ぎず、中入まで終曲になっているような尻切れとんぼであり、近世の戯作の類と見るべきであろう。

泗浜石(しびんせき)名寄にも見えない珍曲。語り物風で謡曲としての面白味はない。近世の戯作であろう。

呪咀顯光(しゆそあきみつ)〔下・田〕元禄四年九月十六日汝謙筆写の謳百番目録（法政大学能楽研究所蔵）・吉田名寄・松尾名寄などに見える。宇治拾遺物語・古事談・十訓抄を始め、諸書に見える有名な説話によったもので、取材の点からも脚色の点からも中世的である。古作の匂いが強い。

酒中花(しゅちゅうくわ)名寄にも見えない珍曲。酒中花は山吹の茎の蘂などで花や鳥その他様々のものを圧搾して作り、それを酒盃や水に浸せば水分を含んで花が開くようにふくれ開く玩具で、延宝頃から俳諧の句に見え初め、元禄頃に流行した。また文中「いかゞし」といった近世語も見られ、元禄頃かそれより少し後の戯作であろう。

小学(せうがく)〔佐・吉〕礼記に基づいて作られた儒教PR用の便用謡風の戯作。吉田名寄に見えるのみで、儒学を江戸幕府が重要視するようになってからの作であろう。

聖宝(しゃうぼう)名寄にも見えない珍曲。古今著聞集などに見える聖宝僧正の説話に基づいて作られた戯作だが、心敬などのことも見え、近世になってからの作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb